（9月例会「コレクション紹介」より）

きじ航空 59 円の後年使用例

永吉 秀夫

1950 年 1 月 10 日に発行された「きじ航空」、色違いの 5 額面セットでの発行でしたが、その額面は 16、34、59、103、144 円という、なんとも奇妙な金額でした。前年 6 月 1 日施行の海外 5 地帯あて航空増料金に合わせために、このような額面での発行となりました。海外あての航空郵便には、種別を問わず 10g ごとにこれらの切手を貼り足せばよいことになっていました（一部の宛先、種別についての例外あり）。例えば第 3 地帯に属する米国本土宛て書状の場合、平面路料金として 20g まで 24 円、超 20g ごとに 14 円切手を 1 枚ずつ貼り、これに航空増料金として 10g ごとにきじ航空 59 円を 1 枚ずつ貼り足す、といった具合です。合理的な方式にも見えますが、重量のかさむ郵便物の場合は切手の枚数が増え、高額普通切手を使って枚数を減らそうとすると複雑な料金計算が必要という問題があり、次の料金改訂（1951 年 12 月 1 日）では合算料金制へと移行しました。

この料金改訂後は半端な額面が災いして、郵便局や収集家のもとに残されたきじ航空の用途は全く失われました。その後 10 年くらいの間、収集家によっていろいろな郵便に混貼で使用されるという状況が続きました。

第 4 地帯あて航空便葉書（料金 60 円）　　AZABU　1956. 8. 31 → オーストリア

そんな中で少しでも有意義な使用例として紹介するのが上の紹介品です。1953 年 7 月の料金改訂で生じた 60 円料金の第 4 地帯あて航空便葉書（1959 年 4 月以降は第 3 地帯、1961 年 9 月まで）に、きじ航空 59 円を 1 円普通切手とともに貼っています。この期間中 60 円額面の普通切手は発行されませんでした。郵趣界に残されている 60 円貼り葉書は、50 円＋10 円、30 円 2 枚などの貼り合わせが多いのですが、上のようなものも充分自然な貼り合わせです。収集家の手元に残された切手を高額のものから順に貼っていくと、必然的にこの貼り合わせとなりますから。